

1. 概要：

- ・総勢7名で「<空気を読む>とはどういうことか」という問いを掲げて、主に、<空気を読む>具体的事例を挙げて共通点を探しながら、<空気>とは何か、その仕組みはどうなっているかについて対話し、考えた。

2. 対話：

(0) 問いの提起

- ・進行役から、今日の問い「<空気を読む>とはどういうことか？」を提起し、対話を始めた。

(1) <空気を読む>具体的な事例は？

- A：上司が積極的に無茶な売上予算を立てて同意を求められたとき、「無理」と思っても黙ってしまう。
- B：PTA委員会で「なぜその活動をしないといけないか」を納得できなくても、黙ってしまう。
- C：新メニューが大きく宣伝されているスタバの店内で、それを注文しないといけない気持ちになる。
- D：グループ Line に入っていて、メンバー全員が反応していたら大変なことになるが、反応してしまう。
- E：裏道にある歩行者用信号が赤のときに、自分を含めて複数人が渡らずに待っているが、誰か一人が渡り出すと他の人達も歩き出すことがある。

(2) <空気>とは何か？その1

- ・<空気>は、相手の気持ち、話の流れや、暗黙のルールのような気がするが、2人だけの場合と、3人以上の場合とは異なるように思う。2人だけの場合は相手の気持ちの割合が大きい、3人以上の場合は、その場の話の流れや暗黙のルールの割合が大きい。→2人の場合においても、その場の2人の間の話の流れを重視していることもある。
- ・その<空気>はどうやってその場の人達で共有されているのか？→どうやって感じるのかだが、五感ではないので、第六感とでもいう他はないが、<空気>を作る人とそれを受ける人がいる。
- ・事例のAとBには、それに従わないと自分に不利益がかかるという共通点がある。曖昧な<空気>の責任にしてそれを免罪符にしたり、責任逃れに使ったりしているだけではないか。<空気>という曖昧な言葉を使わずにできるだけ適切な言葉で言い換えてみたらどうか。

(3) 事例AとBの場合

- ・事例Eでは、人の目を気にしている。前の人が進むと自分も進む。
- ・事例Aでは、上司の意見に異論を言えずにそれを受け入れている。その場の人達で共有されていることは、「最終的にはその責任はその上司が取る」ということではないか。その上司と1対1で打ち解けた場であれば異論を言える場合があるため、一概に自分の不利益を考えている訳でもないと思う。だから、その場がオフィシャルな場か、フランクでオープンな場か。第三者に対して何かを言われたり、影響を与えたりする場かということに関わる。オフィシャルな場では腹の底を言う決断ができないことがある。
- ・事例Bでは、PTAのメンバーが複数人いると大抵は自分の意見を言わない。→その場では、ある動議への賛否が外見からは判然としないため、民意・集団心理のような錯覚から、皆が賛成していると勝手に考えてしまう。そのために、反対が言えなくなる。具体事例としては、コロナ禍のために今年度は予定していたPTA活動をできなくなったが、「子供のためには何かやらないといけない」ということになり、千羽鶴を親子全員で折ることになってしまった。→それは予算消化(金銭の問題)のためか、活動記録で何もしなかったということが許されない(労力の問題)ためか？→純粋に「子供達のためになる活動をする」という(崇高な)理念に反対できなかったからだと思う。
- 事例AとBとでは、反論しない<読まなかった>理由は異なるが、その対象<空気>は以下のように無茶な計画と共通している。A：“無理な”売上予算、B：子供のための“あまり役立たなそうな”活動。
- 事例Bで自分が反論しない理由は、自分の子供を巻き込みたくないから。そういう提案をするPTA委員の人は力がある母親であることが多く、反論することが自分の子供に悪影響を与えるリスクがある。
- 事例AもBも、旧日本軍の無責任だった体制・心理と同様と思う。

(4) 事例Eの場合

- ・事例Eを考えてみると、以下の3つの理由・心理状態が考えられる。a) 村八分が嫌である。b) 単純に前の人に釣られる。c) 一人だと轢かれるが2-3人なら大丈夫と思う。→これら以外に、d) 「信号待ちの他の人達によって警察へ通報される」というリスクを考えるというのがある。
- ・止まっているときの心理は、道路交通法というルールに従っているが、信号を無視して渡り出すときは村八分が嫌という心理が強いと思う。→赤信号で止まるときでも、村八分の心理が働いていると思う。
- a)からd)の中で、a)だけが<空気>と呼ばれる対象ではないか。

(5) 事例FとGの場合

- ・事例F：ライブ終了後の最寄り駅までの帰路で、自分達より後方で約8割の群衆が別の経路を選択して別れた。結果として最寄り駅には自分達を含む先方約2割の群衆の方が早く駅に到着した。途中でその後方8割の群衆の中の誰かが「こっちの方が近道」と言い、それに他の群衆が付いていったと思われる。
- ・事例G：悪事であると分かっているのに多数派に負けてやってしまうことがある。いじめのように多数派になびくと共に、従わないと次の標的にされるという心理は、村八分の心理と言える。
- それは男女を問わない現象で、労働への意識が変わってきている。昔は会社での地位に拘りを持つ男性が多かったが、最近では地位よりも何をすることを大事にする傾向が強いと思う。

(6) <空気>とは何か？その2

- ・<空気>とは、“人に纏わる何か”であり、その<先>を読んで行動している。
- ・会社の上司の事例もPTAの事例も、<空気>とは常識や慣習の前段として一時的にあるものと思う。
- ・事例AとBでは、パワーバランスと呼んで良いのではないか。
- ・事例H：パワーバランスがない新たな事例として挙げたい。同級生3人で昼時に空腹となり、目の前にスパゲティ屋とそば屋があったとき、挙手制で意見を集約することもできるが、他の人が何を食べたいかを探る。これはパワーバランスとは無縁の<空気を読む>行為だと思う。→この場合、<読んでいる>のは情勢(多数派がどこを指向しているか)ではないか。→事例Aで、パワーバランスがなくとも、子供のためとして絶対に善とされていることに逆らうことができない。“お国のため”と同じかもしれない。

3. まとめ

- ・<空気>という曖昧だったものが、いくつかの具体的事例を基に対話を進める中から、“村八分を嫌う多数派の情勢”という考えに到達できた。問いの提起者としては、<空気を読む>から参加者が連想した多様な具体的事例を吟味することによって、この問いに対する理解をより深めることができた。